

論文審査の結果の要旨

氏名：飯田 貴 俊

博士の専攻分野の名称：博士（歯学）

論文題名：加齢と嚥下障害が舌骨上筋群の収縮力に及ぼす影響

審査委員：（主査） 教授 石上 友彦 ㊞

（副査） 教授 植田 耕一郎 ㊞ 教授 岩田 幸一 ㊞

教授 白川 哲夫 ㊞

これまで多くの研究で嚥下機能に対する加齢の影響が報告されてきた。摂食・嚥下障害は高齢者によく見られる症状であり、高齢者の主な死因の一つである誤嚥性肺炎を引き起こすことが多い。顎舌骨筋などの舌骨上筋群は喉頭挙上に関連し、嚥下に重要な筋として注目されてきた。著者らは嚥下に重要な舌骨上筋の強さを評価するための開口力測定器を開発した。しかし、舌骨上筋筋力が加齢と嚥下障害によりどのように影響されるかについては未だ不明であった。

本研究では、健常成人と健常高齢者と高齢嚥下障害者の開口力を比較し、嚥下に重要な舌骨上筋筋力の加齢と嚥下障害による影響を明らかにすることを目的としている。対象は150名の健常者と69名の高齢嚥下障害患者とし、70歳未満の健常成人群（76名；男：女=38：38，平均年齢48.8 ± 13.8歳）、70歳以上の健常高齢者群（74名；男：女=37：37，平均年齢78.1 ± 4.8歳）、70歳以上の高齢嚥下障害者群（68名；男：女=35：33，平均年齢80.7 ± 6.0歳）に区分した。開口力は開口力計で計測し、各群間の比較をおこなった。

健常成人群の開口力平均値は男性で約9.7 kg、女性で約5.9 kgであり健常高齢者群（男性：約7.0 kg，女性：約4.4 kg）よりも有意に大きかった。また、健常高齢者群は高齢嚥下障害者群（男性：約4.5 kg，女性：約3.7 kg）よりも開口力が有意に大きかった。男女差は、健常者では男性の開口力が女性よりも有意に大きかったが、嚥下障害者では有意差がなかった。

その結果以下の結論を得た。

1. 70歳以上の高齢者では舌骨上筋群は加齢の影響によって減弱する。
2. 嚥下障害をもつ患者では健常者よりも舌骨上筋群が減弱している。

これらの結果は加齢による影響と摂食・嚥下障害によって嚥下運動に重要な舌骨上筋群の収縮力が減じていることを明らかにしたもので、歯科基礎医学および摂食・嚥下リハビリテーションの発展に寄与するところ大であると考えられる。

よって本論文は、博士（歯学）の学位を授与されるに値するものと認められる。

以 上

平成26年3月5日